

令和3年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立三木小学校
-----	-----------

1 学校教育目標

自ら学び 心豊かで たくましい子の育成

2 本年度の重点目標

<ul style="list-style-type: none"> ・確かな学力の向上 ・特別支援教育の充実 ・安全・安心な教育環境の整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな心の育成 ・「話せる英語教育」の推進 ・信頼される学校づくりの推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・健やかな体の育成 ・心の通い合う生徒指導の充実 ・あいさつ、返事、掃除、時間の徹底
---	---	--

3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	・子どもの興味関心意欲を大切にした授業づくり	コロナ禍で学習が制限されている中、昨年度取り組んだことをもとに、短時間での話し合いなどの学習の工夫をさらに効果的に取り組めるよう、授業の中に取り入れていった。また、タブレット端末の本格的導入を受け、児童の実態に合わせ、話し合いや発表の際にタブレット端末の様々な機能を活用し、話し合いの論点を明確にしている。さらに、大型モニターを全教室に導入し、学習内容を拡大提示することによって、今何を学習しているかを共有し、大切なポイントをしっかりと押さえることができている。	A	本年度研究している発問や「問い直し」の研究をさらに進め、児童が積極的に活動できる授業を行い、学習意欲を高めていく。また、その中で「話す」ことだけでなく、「聞く」姿勢を大切に、クラス全体で学んでいこうとする姿勢を醸造していく。 タブレット端末を使った授業の実践に向けて、情報共有機能「OneNote」や「Forms」の研修を教師間で重ね、技量を高めることにより、さらに効果的な活用方法を探っていく。
	・落ち着いた学習環境づくりや言語環境の整備	本年度は発問の追求をテーマとし、課題の提示からまとめまでを見据えて授業をプランニングすることで、児童の深い学びにつなげていこうとする研究を続けている。また、タブレットを使った学習では、まとめの学習で「タブレットドリル」を積極的に活用し、児童が個々にあった課題に取り組めるようにしている。また、その学習の中で、児童の質問等に答えることで個々の児童が個別に持っている苦手な課題を残さないように配慮している。読書の習慣づけにおいては、給食後の10分間程度の時間に集中して読書に取り組めるようになってきており、小説などの長文に挑戦している児童も増えてきている。 放課後週1回1時間程度、基礎学力の定着を目的として、「算数がんばり学習タイム」を実施している。高学年の希望者が参加している。地域の指導者と学級担任とが密に連携を取り、ここに合った課題を設定し取り組んでいる。児童も達成感をもって学習に取り組んでいる。	B	どの教科の学習においても、めあてを明確にし、振り返りの場面で思考を深める取組を行ってきたが、授業の中で基礎的基本的な内容を身につけさせる場面を設定するような授業展開を検討し、「わかった」「できた」を実感できる「わかる授業」をめざそうとしているが、授業の内容が難しいと感じる児童もおり、授業のいずれかの場面で、基礎基本の内容をさらにしっかり創造していく。 タブレット端末を使った学習においては、各場面において明確な目標を提示し、プリント学習との併用も適宜行っていく。 休み時間や放課後の時間を使って、個々の児童に応じた学習支援に引き続き取り組んでいく。また、今年度と同様に特別支援教育指導補助員や日本語指導支援員など各教職員と担任が密に情報共有し、児童の困り感に寄り添うきめ細やかな教育を行っていく。 読書においては、本年度の取組も継続するとともに本の紹介など、より本に親しむ環境づくりに取り組んでいく。
	・学習習慣を徹底し、基礎・基本の学力の定着	単元の始めには、既習の学習を振り返り、学習する内容の見直しをもったうえで、学習計画をたてさせ、主体的な学習を促している。また、タブレット端末の情報共有機能やカメラ機能などを使用することで、今までできなかった形での意見交流や自分の活動の振り返りができるようになっている。それらを、全教科で話し合い活動や振り返りのツールとして適宜取り入れることにより、児童の主体的な学習につなげている。また、児童自身がタブレットの使い方に慣れてきており、調べ学習でも効果的にインターネットを使え学習を深められている。さらに高学年では、調べた内容をPowerPointにまとめ、異学年に発表するなど、学び合いを促している。昨年度から教科化された外国語や外国語活動においては、ALTと協力しながら、既習の文章を使った会話練習を積極的に取り入れ、児童にできるだけ話し、活動する時間を多く取れるような授業を展開している。また、ジョリーフォニックスも毎週取り入れ、中学校からの英語学習に備えている。	B	ICT機器の活用においては、個々の教員によって習熟度に違いがある。情報共有機能「OneNote」や「Forms」の研修機会を継続的に持ち、個々の技量を向上させ、授業に反映させていけるようにする。また、今年度の「発問の追求」につなげ、より効果的な場面でのICT機器が活用できるように、各教員の実践を持ち寄り、交流することによって、授業の質の向上に努めていく。 外国語の学習においては、高学年はこれまでのゲームを中心とした学習と比べて難しくなっていると感じている児童が出てきている。また、低学年は、1か月に1回の学習では、英語を身近に感じられていない現状がある。コロナ禍の状況下では、配慮しなければいけないことを多いが、これまでのような英語を使ったゲームに全校で取り組む「イングリッシュウィーク」の取り組み等を考え、様々な場面で外国語に触れる機会を多く設定していく。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

自己評価方法は、適切である。 児童、保護者、教職員、それぞれにアンケート調査を行い、総合的に評価が行われている。いろいろな角度から適切な分析を行い、合わせて過去の数値化も記され過去との比較、そして現状実態把握ができ、次なる改善策にもつながりわかりやすい。
--

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>評価については、概ね妥当である。</p> <p>〈学習指導〉 コロナ禍が長期にわたり、学習時間の確保や感染対策を実施しながら授業を行うのは大変だったと思う。先生方はよく働きかけてくれたと実感する。 GIGAスクール構想の下、日常の学習にタブレット端末やICT機器を積極的に活用する学習形態が導入され、指導等に苦勞されたことと思う。タブレット端末授業については、様々な機能活用、また大型モニター導入により、学習状況の共有化は今後も必須課題でもある。活用場面、方法については研究段階と思われるが、他校との情報共有を図りながら、また、教師の技量アップにも努め、児童の学力定着のためのツールとして有効に活用されたい。 外国語授業においては、英語と親しみやすい環境づくりがなされているので、引き続き、ゲームやワークを取り入れた授業づくりを願いたい。 児童によって学習の理解度には差があると思われるが、理解が不十分な児童に対して、確かな基礎学力の定着に向けたフォローを引き続き願いたい。</p>

生活指導	・ 基本的生活習慣の確立と規範意識の育成	今年度は、昨年度同様に感染症対策を基盤としながら生活指導を行った。その結果、毎日の検温、手洗い、マスク着用は学校生活を送る中でかなり定着した。また、今年度は「爪切り」をしっかりとすよう呼びかけることで、怪我や感染防止に努め、爪切りの習慣が身についた。さらに、おはよう指導や三木小っ子のきまりの徹底、月ごとの生活目標の取組により、規範意識の育成を図った。	B 来年度も感染症対策を根本におきながら、「挨拶、返事、掃除、時間」の取り組みを継続していく。特に挨拶については、自分から進んで挨拶をする児童が個人や学年によって大きな差が出ていることから、まず、教師から子どもたちに挨拶をしていき、習慣化を図っていく。また、タブレットを使用する頻度も増えたことから、インターネットやスマホの使用をする上で、情報モラルの向上を図っていく。さらに、三木小っ子のきまりについては、徹底を図るために、クラスで確認する機会を増やし、保護者にも啓発していく。	〈生活指導〉 登下校の児童達は、明るく楽しそうにしている。児童のアンケート評価にも出ているように、何か昨年度と比べておとなしい印象を受ける。挨拶も言われてからする様子が感じられる。 アンケート結果から、児童の回答において肯定的に答えている割合がほぼすべての項目において過去2年よりも低下している。特に、挨拶や返事については、児童、保護者ともに肯定的な割合が下がっている。学校生活における指導や様子の確認を家庭と協力しながら引き続き願いたい。withコロナで日常生活を過ごしていかないといけない。「コロナだから仕方がない」ではなく、挨拶などできることから、自ら進んでできるように、保護者や地域と協力して取り組んでほしいと思う。
心の教育 (道徳教育・人権教育)	・ 道徳の時間の充実と実践化	昨年度実施したカリキュラムについて本年度も検討を行った。他教科や本校の教育活動に合わせたカリキュラムの改善を行い、日々の学習活動に活かした。教材研究を行うと同時に評価についても研鑽を積んだ。	A 高学年になるにつれて自尊心が下がってきているので、自尊心を高めるような学習の進め方や指導方法などの研鑽を積んでいく。児童の実態に応じた授業づくりを進めるとともに、評価が授業づくりに生かせるよう研究を進める。	〈心の教育〉 教職員アンケートの回答について、肯定的な割合が大きく下がっているのが気になる。コロナ禍でいろいろと制限されたり、プラン変更を余儀なくされる場面があったり、時間的な余裕がないのだろうと推察する。忙しい中で、子どもたちのために頑張っていたいただいていることは大変感謝しているが、今後も心の教育の充実に向けたご尽力を願いたい。 コロナ禍だからこそ、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」を大切にしたい。 自尊感情の数値がやはり低いように思う。今の時期なので、人と接することが少なくなっており、大人も子どもも閉じこもることが多くなってきたからだろうか。やはり、人間は互いに刺激し合わないといけないだろう。自尊感情を高める取組を引き続き願う。 児童会活動の取組である「にっこりレター」については、ネーミングも良く、温かみを感じさせられる。友だちやクラスの良いところを手紙で書き、放送で紹介するといったことで、周りの人たちのことを認め合うクラスづくり、学校づくりに役立ったとあった。昨年に引き続き、これこそ三木小っ子のお手柄であり、児童からの心の教育と思った。今後も児童の自主性と合わせて継続していただきたい。
	・ 自尊感情を高める人権教育の推進	感染対策に留意しつつ可能な範囲で異学年交流を行った。国語科や総合的な学習等で学習した成果を発表するなどの活動を行うことで、お互いのことを思いやる素地を養った。また、児童会活動の取り組みで、友達やクラスの良いところなどを手紙で書き、児童会役員が放送で紹介する「にっこりレター」の活動を行った。日々たたくさんの「にっこりレター」が提出され、周りの人たちのことを認め合うクラス作り、学校作りに役立った。	B アンケートの「心の教育」の「自分のよいところが言える」の数値がやや低かった。運動会・音楽会などの行事・活動を縮小して行ったものの、従来と比べ自分の頑張りや成果を他者に認めてもらう機会が少なかったことが要因の一つかと考えられる。そのため、次年度も感染対策に留意しつつ、活動の幅をより広げられるようにしていく。また、タブレット端末、大型提示装置等を活用した交流や発表の機会を増やしていく。	
	・ 一人一人が活かされる温かい学級・学校づくり	今年度は運動会や音楽会などの行事を学年ごとで行うなど規模を縮小して開催することができた。他学年と表現運動を見せ合う場を設けるなど、目標に向かって高めあっていく活動を取り入れた。また、日々の係活動や学級活動の中でも児童相互の交流の機会を意図的に設けていくことでお互いのことを思いやる集団作りにつながった。	A 教師が、学級づくり、授業づくりについて研鑽を積むことで、さらに各行事や学習において教え合いや話し合い活動を計画的に入れていくようにする。また、お互いの良さに気づき認め合える学級づくりにも道徳の学習を中心として継続して力を注ぐ。	
特別支援教育	・ 児童の内面理解に基づいた支援	月1回の委員会を行い、全学年の担任、特別支援学級の担任及び養護教諭等を含めて、配慮の必要な児童についての情報共有、指導法を検討している。今年度は、児童一人一人の成長を図っていくために、全ての学級で活用できるような指導法、児童の実態把握に関する研修を行った。職員間で意見交流を図り、支援方法についての知識向上を目指している。	B 学校が楽しいと感じている児童と保護者の数値が下がっていることから、子どもたちが楽しいと感じる行事や学習内容を、感染対策を取りながら、考えていくことが必要である。また、特別支援教育に関しても、具体的な指導事例を通じた研修を実施していく。さらに、職員間での交流を深める機会を確保していけるようにしていく。	〈特別支援教育〉 昨年度に引き続き、障がいのある子どもと障がいのない子どもが共に教育を受けることで「共生社会」の実現に貢献しようという考え方(インクルーシブ教育)に基づき、保護者の理解合意のもと、それぞれに合った教育指導目標を明確に、適切な指導、配慮を行っていただきたい。障がいの有無といった視点ではなく、児童一人一人に合った教育(インクルージョン)も願いたい。 これからも、一人一人の個性を尊重した授業、対応を願う。 コロナ禍でいろいろと制限されたり、プラン変更を余儀なくされる場面のある中で、保護者との情報共有や児童との向き合い方については、いつも以上に配慮いただいていると思われる。今後も引き続き願いたい。
	・ 共に育つ特別支援教育の充実	特別支援学級での活動の様子を見学し、授業の様子を見学したり、説明や質疑応答を行ったりして、児童理解を深めている。特別支援学級担任と交流学級担任が時間割についての打ち合わせを行い、特別支援学級の児童が交流できる授業内容を検討している。	B 今年度は特別支援学級担任が児童に話をしたり、実際に学習している様子を見学したりするなど、障がいについて学ぶ授業を実施したが、来年度も引き続き継続、実施していき、障がいに対する児童の理解を深めていく。	
安全教育	・ 安全指導や防災教育の充実	学期ごとに避難訓練を実施し、学校全体で防災意識を高めるようにした。また、今年度は休み時間に実施し、より実践的な取り組みを行うことができた。今年度も、予定していた引き渡し訓練を行うことができなかった。しかし、激しい雷雨の接近に伴い、一斉下校や保護者への引き渡しを行った。保護者への連絡や保護者からの連絡への対応等、実際に行った成果と課題が明確になった。定期的な取り組みとしては、各地区の危険個所確認や月に2度登校時に通学路での安全指導を行った。	B 学校と地域・保護者が連携した取り組みが来年度実施できるように計画し実行する。今年度実施し、課題が明確になった部分については、児童、教職員ともに防災や防犯等、安全に対する意識を高める。 登下校時の安全な通学方法についても随時指導していく。	〈安全教育〉 今年度も、教職員が通学路の危険個所確認や月に2度登校時に通学路での安全確認が行われている点は評価できる。安全面では、学校内の遊具関係、エレベーター、防犯用さすまた、消化器等の点検も願いたい。 三木市内での不審者情報も増えている中、不審者対策の指導及び学校内に不審者が現れた際の対策、児童への指導、心のケア等も定期的に行ってほしい。 下校時間帯に激しい雷雨が接近した際には、保護者への迅速な連絡やスムーズな児童の誘導など、うまく対応いただけたものと理解している。明確な課題に基づいて、さらなる改善につなげてほしい。
保護者・地域との連携	・ ふるさと学習の推進	今年度は、地域の方をゲストティーチャーとして招聘し、三木合戦の絵を見ながら当時の歴史について学ぶ「絵解き」の体験学習(6年生)を実施した。また、コロナ禍のため、保護者や地域の方々との連携交流が制限される中、町探検(2年生)や安全マップづくり(4年生)、稲刈り体験(2・5年生)、みそづくり体験(3年生)などの活動を通して、ふるさと三木を愛する心の育成を行った。	B 総合的な学習の時間などを通して、「ふるさと三木」について学ぶ機会を設け、ふるさとを愛する心を育成する。これまでの体験学習を継続して進めると共に、新規の人材開拓にも努め、地域の教育力を有効に活用し、教育活動の充実を一層図っていく。	〈保護者・地域との連携〉 今年もコロナ禍で連携交流が制限される中、地域と連携した町探検や安全マップ作りや体験学習等を行い、わが町ふるさと三木を愛する心の育成を行えたことは大変良かったと思う。今後も地域と触れあいを続けていただきたく思う。評価はAが妥当と思う。 コロナ禍の中での実施は、いろいろと配慮を要する点が多いと思われるが、児童にとっては通常の学習とは異なる発見をする良い機会であるので、引き続き進めていただきたい。 おはなし会も含め、感染対策をしたうえで、保護者、地域の方々とは触れ合う機会ができることを願う。 ホームページや学校通信等で児童の学校生活の様子は発信されている。しかしながら教職員アンケートでは約40%があまりできていないとのこと。通信、ホームページ等は、学校と保護者、地域のつながりの手段でもある。これも学習指導同様に、ICT教育にもつながるので、教職員みんなが通信、ホームページ等に関心を持ち発信に関わっていただければと思う。
	・ 通信・ホームページの充実	学校生活や学校行事への取組の様子等を伝えるため、学校だよりや学年通信、学級通信の発行、Webページの更新に努めた。しかしながら、Webページの更新については、保護者に児童の学校生活の様子を適宜伝えることは十分にはできなかった。	B 学校行事、オープンスクール、参観日を通して、保護者や地域の方に教育活動を公開するとともに、日々の児童の様子や学校の教育活動等を学校だよりや学年通信、ホームページの更新による情報発信を積極的に、地域に開かれた信頼される学校づくりを推進していく。	